

国王シャルル7世として戴冠式をランスの大聖堂で挙行。その後も幾つかの戦いで奇跡的に勝利を収めていく。

そして1430年5月23日コンピエーニュでの戦いで、敵の一矢を受け落馬、捕縛され捕虜となる。

この時、なぜ国王シャルル7世は動かなかったのか？

当時、捕虜については条約があり、身代金を支払うことで身柄の引き渡しを常とされていたにも関わらず王は介入しなかった。後世の歴史研究家たちは彼の非道な振る舞いを非難している。

母国フランスからも見捨てられ、ジャンヌは異端審問の裁判で火刑に処せられ死亡する。

そして、25年後、復権裁判の結果、無実と殉教が宣言された。その後1909年に列福、1920年に列聖された。これが一般的な史実である。



シラーは何故、ジャンヌを戦死にしたのだろうか？彼はこの中世カトリック教会の異端審問については、既に「ドン・カルロ」(1787年)での「宗教裁判長」を強烈に性格描写している。

ジャンヌが受けた宗教裁判は、非常に政治的な思惑が交錯しているもので、中世カトリック教会は勝者(イギリス)に付度「オルレアン魔女」と一方的に決めた裁量であった。ジャンヌの死後、復権裁判で無罪と殉教が認められたが、シラーは神の存在を認める美しい文体で「オルレアンの少女」を書き綴っている。(「オルレアンの少女」と書いて乙女と読む。佐藤通次訳 岩波分庫)

シラーは処女作「群盗」(1781年)で示した通り、自由への強い憧れと権力への反抗、そしてこの「オルレアンの少女」では神の存在を認めつつ、一方では社会の因習、つまりカトリック教会の教理に基づき社会を動かすこと等には強い反発を持っていた。

シラーが1795/08/17ゲーテに宛てた書簡より

キリスト教には至高なものに向かう素質が潜在していると思いますが、生活におけるこの宗教の多様な現れが、わたしには不快で悪趣味に思えるのは偏にそれらが当の至高なものを表現するのに失敗しているからです……

『ジョヴァンナ・ダルコ』研修会 2023/05/27 錦職昭彦